# 精神分析学よりみたプロメーテウス解釈

## —— その残存理由をめぐつて

竹　内　　豊 *

## A Psychoanalytic Essay on Prometheus
## ——Thinking over the Reason for the Survival of *Prometheus Bound*

YUTAKA TAKEUCHI

**要　旨**

アイスキュロスの三部作の一つと考えられている『縛られたプロメーテウス』だけが，他の二篇が今日散逸されているのとは別に現存しているが，それはただの偶然のことか．それともそれには何か理由らしいものはあるのか．また，それとともにわれわれがプロメーテウスの性格を考察するときに，彼の性格は精神分析学よりみた「自己膨脹」であるという点に達する．これらのことにより彼の性格の異常さ，大きさから，この一編だけが今日まで残存した理由をつかむ．

**Synopsis**

In Aeschylus' Prometheus Trilogy……*Prometheus Bound, Prometheus Unbinding, Prometheus the Fire-bringer,* not three dramas but one……only Prometheus Bound survives to our time. Is this fact intentional or unintentional? Or is it for any particular reason? We find the clue for solving the problem in Prometheus' character. We find, in his character, self-inflation, that is, narcissism, from the view-point of psychoanalysis. This play, therefore, survives to the present day by Prometheus' gigantic character with self-inflation.

アイスキュロスの『縛られたプロメーテウス』は彼の三部作の一つと考えられているが，他の二編，すなわち『火をもたらすプロメーテウス』と『解縛されたプロメーテウス』は今日伝えられていない．それは単なる偶然の所作であるのか，それとも他に理由があるのか．とにかく『縛られたプロメーテウス』だけが今日まで伝えられているのには，それ相当の魅力とか，理由とかがあってのことであろう．この点について考えてみたい．本論にはいる前にわれわれはこの『縛られたプロメーテウス』にかかわるわれわれの先入観と，今一つの全くわれわれ——人間中心の同族的見解がされてきたことについてあらかじめ一言しておくことが必要のようである．

われわれは例の神話——余りにも広く知られているプロメーテウス神話に，余りにも影響されすぎていて新しい自由な考え方をするのに遠慮をしているようである．またそれと同時にアイスキュロス自身にもその責任は多分にあると思われる．しかもアイスキュロスについては「それと同時に」ではなくて「神話にもまして」と言い直す必要がある．神話におけるプロメーテウスの場合にもわれわれはプロメーテウスはゼウスによって不当の取扱いを受けていると考える．プロメーテウスは実は人間に「火」をあたえる前に人間どもを煽動してゼウスに悪戯をしているにもかかわらずである．しかるにアイスキュロスにあっては，プロメーテウスには全く落度がなく（逆にゼウスが王位につくことに助力をしている），ただ人間に「火」をあたえたことによってのみゼウスに責められていることになっている．人間にとっての偉大な恩人であるものが，正義の神であるゼウスによって，黒海の北，スキュティアの曠野の涯の巌峨として聳える岩山の上に不壊金剛の足枷をされて磔けられているのをみては，われわ

* 講師　一般教科

れ人間は正義の神たるゼウスの正しさを疑い義憤を感ずるのももっともなことである．それがために逆にプロメーテウスの正に対して不正を働く神ゼウスという対立が広く世間に行なわれているのである．

このような考えは何ゆえに行なわれるのか．それはわれわれは自分が人間であるという立場から判断することによって惹起される．われわれが余りにもわれわれの恩人としてプロメーテウスを考えるからである．

このような経緯のなかであえて次のことを明らかにしておきたい．それはプロメーテウスはゼウスにとってのプロメーテウスであり，ゼウスはプロメーテウスにとってのゼウスであるということである．われわれ人間・コントラ・ゼウスでもなければ，またわれわれ人間・コントラ・プロメーテウスでもない．あくまでそれはプロメーテウス・コントラ・ゼウスである．ゆえにプロメーテウスがわれわれに何を運びきて，われわれに何を恵もうとも，あるいは逆にわれわれに不幸をもたらそうとて，それらのことについてはわれわれが何一つ心を悩ます必要はないということである．そこは人間不在である．

ゼウスは全能の正義の神である．それは不動のものである．しかしプロメーテウスの立場からはゼウスはおのれをも知らぬ成り上がりものの恩知らずである．

「かつて神々が怒りを発して，互い同士の争いが起ると忽ち，それこそゼウスが王位に即くようクロノスを王座から追い出しにかかる神々もあり，また反対にゼウスを決して，神々の支配者になどさせまいと，望む神々もあった．その折私は最善の策を立てて，天と地との子の，ティターンどもに勧めたのだが，その説得もかいがなかった．彼らは狡智にたけた計略をさげすみ，頑な思い上りに，力で難なく，勝を得ようと考えたのだ．だが私は，母のテミスすなわち大地から——とは，姿は一つながらに名前は沢山にある女神のこと——一再ならず，将来への予言をかねて聞かされていた．つまりは，力において勝り，かつ暴力をふるう者ではなくて，計略で敵を制する者こそが勝利を得ようと教わっていた．そうしたことを，私はいって聞かしてやったが，彼らはてんで耳を貸そうともしなかった．されば，その時，差し当っての最上の策は，我からと望んでゼウスの望みに応じて，母親共々，味方につくほかないと見えた．そこで私の計略により，タルタロスの闇の底いの奈落のうつろに，生まれもふるいクロノスが，一味徒党ともろともにかくし込まれることになったのだ．こんな助けを私の手から受けてるくせに，神々の僭主は私へ，こんなにひどい刑罰をその返礼にして返したのだ。」(1)

また，プロメーテウスは善事をなしたことを自負している．

「一言にして言えば，なにもかも一括めにして人間のもつ技術（文化）はすべてプロメーテウスの贈り物だと思ったがいい」(2)

このプロメーテウスのなした善というものは，あくまでも人間に対してのことである．D・W・ルーカス氏はプロメーテウスが人間に火をあたえたことは「愚かな憐憫の情から」(3)と述べているが，それが何の気持ちから出たものであっても，プロメーテウスのなしたことは神神に対しては全く善からぬことである．われわれはここで改めて，われわれの当面の課題は人間・コントラ・ゼウスでもなければ，人間・コントラ・プロメーテウスでもなく，プロメーテウス・コントラ・ゼウスであるということを確認しなければならない．プロメーテウスは神の世界の異端者であり，無法者であり，裏切者である．そのようなものは罰せられるのが当然の理である．そうしてそれがアイスキュロスにあっては大きな課題の一つであった．(4) プロメーテウスを引致して縛め上げる時に，ゼウスの部下のクラトスでさえ次のように述べる．

「彼奴は盗んで人間どもにやったのだから．その罪過の償いを神さま方に当然せねばならないわけだ」(5)

しかもここで注意しなければならないことは，この『縛られたプロメーテウス』一編においてもギリシアの伝統たる中庸の精神の教えが含まれていることである．ギリシァ民族こそ調和を愛する民族であったことは周知のとおりである．ギリシァ芸術の粋たる彫刻と建築にあっての主要な構成は，一定の空間中における均斉と調和ということにある．彼らギリシァ人はただ芸術にとどまらず，文学にも哲学にも，また生活の万事にこの理想を忘れないことが肝要とされた．(6) この中庸，節度を失うこと（ὕβρις）が神の怒りをかうことであった．アイスキュロスにあってはそれに対する定めはきわめて簡単であった．ヒュブリスは必ず罰をその報いとしていた．(7) クラトスはプロメーテウスに向かってそのヒュブリスをいましめる．

「そうした報いをあなたは，人間をいとしく思う心根から受けるにいたった，というのも，神であるの

に，神々の憤りにも一向ひるまず，人間どもに，正当以上のもてなしを与えたのだから．その償いにこの索漠とした岩角で，見張りをつゞける訳だが，直立したまゝ，眠ることも，膝を折ることもかなわず，どれほど嘆き悲しんでも，喚き立てても，甲斐はないことだろうよ」[8]

また，コロスもそのことを歌う．

「人間たちを不相応に助けてやるのは，お止めなさいまし」[9]

「自分一人のお考えから，人間たちを，あまり大切になさったためか」[10]

大洋神のオーケアノスも忠告のことばを述べる．

「プロメーテウスよ，して御身に最善の道を勧めたいのだ．もとより御身は，知恵分別に富んでいようが，身の程をよく弁えて，新規な仕方に調子をよく合わせることだ．神々の支配者も新規になったのだからな．だがもしそんなに乱暴で，鋭い刃をもった言葉を吐きつゞけるなら，きっとゼウスは，御身よりはるかに高い御座にいながらそれを聞き込み，ついには今の御身のかさねがさねの悩みさえ，児戯にひとしく見えることにもなりかねまい．だから，まあ気の毒ながら，御身も今のいきり立ちを棄て，この禍いから遁れる道を求めるがよい．こうした勧めは，あるいは陳腐に聞えもしよう，だがしかしだ，この有様は，あまりにも思い上った舌に対する，プロメーテウスよ，報酬なのだ」[11]

更に，この劇の最後のところでプロメーテウスはヘルメスに「全くお前は慎しみなどはてんで知らぬ男だ」[12]と責められている．こういったプロメーテウスに対する他者からの忠告，批判のことばにも見えているところだが，プロメーテウス自身の思い上がったヒユブリスなことばは余りにも事実ひどいのである．次の引用はその万般を示している．

「プロメーテウスよ，御身はこの諺を知らないのか，言葉（条理）は，乱れた心の医師だという」

「もし人が機宜に応じて心を和らげ，いきり立つ心を無理やり，抑えつけようとしないなら」[13]

更に，

「だが一体，この成り上りの神々の栄えを，私以外に誰がそもそも，不動のものにしてやったのか」[14]

プロメーテウスはその名の通り「予め知る者」[15]という名によって，ゼウスが「結局はあのこと（＝ゼウスがおのれが命数を知りたいということ）のためうちひしがれて，いつかはやさしい気質になろう．して頑なないきり立ちをもついにやわらげ，仲直りと友愛とを，前から望んでいる私に，彼の方からも，いつかは望んで進めて来よう」[16]というために，このような傲慢な態度をとっているのであるが，いくら彼が「予め知る者」[17]と言われても13代後の世のことを今日の世とはきちがえていることは，やはりおのれの能力の過信から生じているヒュブリスである．[18]すなわち，オーケアノスの忠告「身の程をよく弁えて新規な仕方に調子をよく合わせることだ．神々の支配者も新規になったのだからな」[19]が示すように，プロメーテウスの甚しい時代錯誤があり，時代に即応してゆけない性格を物語っている．それはただ頑迷とか頑固とかの性格とは根本的に異質のものと推察される．あらゆる苦痛が伴ってもそれを意に介しない性格，他者の忠告をも聞き入れることのできない性格，ここにプロメーテウスの何かに憑かれた異常な性格を露呈する．

プロメーテウスはおのれが不滅のものであり，おのれほどゼウスや他の神神，更に人間のために力を尽くしたものはなく，また知恵分別にたけたものはないと信じている．彼はおのれみずからを絶対的存在とおき，ゼウスに対抗する．いな，ゼウスと同一，あるいはそれを超える存在とみずからをみているのである．[20]ここにおいてプロメーテウスの何かに憑かれたものをわれわれはナルチシズムとみなす．カレン・ホルネイはその『精神分析の新しい道』のなかで次のように述べている．

「人は困難な条件のもとで生きぬくために，不服ながらも厳しい鋳けを守り通すか（超自我），自分を殺して人に頼るか（マソヒズム傾向），或いは自己膨脹（ナーシシズム）の方法をとる．そしてどの方法をえらぶか，どの方法を主にするかは，環境の条件の特殊な組合せによってきまる」[21]

プロメーテウスには第一の方法と第二の方法はありえない．次のことばをきく時 Jacta alea est.[22] である．

「すべての神を，私は憎むのだ，私のおかげを蒙りながら，不法にも私を虐待するかぎりは」[23]

彼には第三の方法しか残されていないことをわれわれは容易に気付く．彼は全くおのれに憑かれていて他者のことばも何も感じとれなくなっている．ヘルメスは次のように述べる．

「こいつは全く，気が狂った者の，思案や言葉に聞える．一体どこが狂人のと違うというのだ，この男

の高言が[24]」

彼はそのナルチシズムをもってあらゆるものを消化している．今や彼には怖れるものは何もない．彼の「熱情的状態」[25]にあっては苦痛は一種の満足とさえみえるようである．フランツ・アレギザンダーは「自我と相容れない満足を果すために苦痛を利用するのはあらゆる神経症の根本機制の一つである」[26]と言っているが，プロメーテウスの自己膨脹の程度は苦しむことなしには，彼の精神は満たされるところがないような強烈なものである．ここにプロメーテウスの悲劇が存する．苦痛はアイスキュロスの好むテーマであって，人間は苦痛によって知恵を得るといわれているが[27]，われわれの問題としているのは，最初に提起しておいたとおり，それは人間のことではなくて，プロメーテウス・コントラ・ゼウスの問題であるが，この『縛られたプロメーテウス』が悲劇として今日まで成立存在しているのは——これも最初のところで既に述べたところであるが，他の二篇，すなわち『火をもたらすプロメーテウス』と『解縛されたプロメーテウス』は今日残存していないが，このうち前者は周知の神話のとおり人間に火という偉大な恩恵を与えたプロメーテウスを扱い，後者はゼウスとプロメーテウスとの和解を扱ったと推定されている——これが，やはりアイスキュロスの好む苦痛のテーマによるあくまでも個性的なプロメーテウスの性格のためである．ゆえにプロメーテウスとゼウスの間には和解などというものは成立するかどうか——すなわち，特に『解縛されたプロメーテウス』なるものがあったということに疑義が生ずるところでもある．プラトンは『ポリティア』において「かよわい本性は決して大きな善悪の原因ではあり得ない[28]」「最もよい本性から国や個人に最大悪事をする人々も，それから又風向き次第では善いことをする人々も現われる．それに反して小さい本性は個人にも国にも決して大きなことをしない[29]」と言っているように，その本性の大きさから悲劇にも強弱を生ずる。（ただ，ここで誤解を免れたいことはプラトンのいう「善悪」ということばを観念的に解釈してほしくないということである．われわれはプロメーテウス・コントラ・ゼウスをもって，ここで善悪の対照を考えてはいないからである）

プロメーテウスの「異常さ」，「大きさ」はまず彼が巨人神であるということにおいても，巨大なものを好むギリシャ人に適うものであり[30]，また更にプロメーテウス・コントラ・ゼウスという偉大な二つの力の対立を存在させたのは，実にギリシャ人の力を示したものと考えられる[31]．

アイスキュロスがただ単にプロメーテウス神話があったからといって，ただ模倣的におのれのプロメーテウスを作ったとは到底考えられないし，またこの劇はアイスキュロスの他の劇とはちがって劇中には殺人行為も，男女の葛藤も，いわゆる事件らしいものは何もないことを考え合わすときに，今まで述べられてきた観点をもって，他のプロメーテウス二編が今日散逸しているにかかわらず，この一編だけが今日までにその残存を許す最も強力な要素であると考えられる．われわれはこれがゆえにこの『縛られたプロメーテウス』一編だけの残存に蓋然性を認め，必然性と偶然性とを認めることをさまたげるものである．

（注）

(1) Aeschylus, 呉　茂一訳『縛られたプロメーテウス』（ギリシア悲劇全集 第1巻　人文書院　昭和35年）pp. 95—6（以下たんに Aeschylus と略称する）

(2) *Ibid*, pp. 103—4

(3) D.W. Lucas, *The Greek Tragic Poets* (Cohen & West LTD, London, 1950), p. 77

(4) G. Lowes Dickinson, *The Greek View of Life* (Methuen & Co. LTD, London. 1949), p. 25

(5) Aeschylus, p. 89

(6) この中庸については Aristotoles の *Ethika Nikomacheia* 1106b—1109bに詳しい．アリストテレス 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』（アリストテレス全集第13巻　河出書房　昭和27年）pp. 63—82

(7) H.D.F. Kitto, *The Greeks* (Penguin Books), p. 177

(8) Aeschylus, p. 90

(9) *Ibid*, p. 104

(10) *Ibid*, p. 105

(11) *Ibid*, p. 98

(12) *Ibid*, p. 117

(13) *Ibid*, p. 100

(14) *Ibid*, p. 102

(15) プロメーテウスはギリシア語で Προμηθεύς とつづられる．この名は προμηθής（先を見とおす）ということばから出たもの．

(16) Aeschylus, p. 95

(17) ゼウスはある女性と契って一人の子を生ませる．この子は彼よりも強く，やがてゼウスを滅ぼす．この時にプロメーテウスも救われる．この間十三代の歳月がかかることを意味している．

(18) 引用(16)のなかに「前から望んでいる私に」ということばをプロメーテウスは述べてはいるが，そのことばの裏付けとなる友愛，謙譲の態度行動は何一つとられていない．第一，彼はゼウスの方から頭を下げてくることを考えている．

(19) Aeschylus, p. 98

(20) われわれはこの点においてフリートリッヒ・ニーチエを想起する．彼は近代におけるプロメーテウスである．ニーチエは「もし神々にして存在すとせば，われ，神の一たらざることを，いかにして堪え得ようか．されば，神々は存在することがない」(佐藤通次訳『ツァラトゥストラはかく語りき』角川文庫　p. 148）と述べているが，超人（Übermensch）に達しようとしたニーチエはみずから下人（Untermensch）に凋落することはプロメーテウスに同じである．

(21) Karen Horney, 井村恒郎・加藤浩一共訳『精神分析の新しい道』(日本教文社　昭和27年）P. 71

(22) 「骰子は投げられたり」　シーザーの有名なことば．シーザーは紀元前49年にこのことばを言ってルビコン河を渡り，ローマ政府の大権を握るポンペイとの合戦を始めた．

(23) Aeschylus, p. 117

(24) *Ibid.* p. 119

(25) クレランボーの用いた要語．アンリ・バリュック著　村上仁・荻野恒一・杉本直人共訳『精神病と神経症』(文庫クセジュ）の40頁からの引用．

(26) Franz Alexander,　加藤正明・加藤浩一共訳『現代の精神分析』(筑摩書房　昭和28年）p. 195

(27) Laura Jepsen, *Ethical Aspects of Tragedy* (Gainesville, 1953), p. 35; p. 103

(28) Platon,　岡田正三訳『ポリティア』(プラトン全集第8巻　全国書房　昭和23年）pp. 21—2

(29) *Ibid.* p. 30

(30) Jakod Burckhardt,　新関良三訳『ギリシヤ文化史』(東京堂　昭和32年）第4巻 pp. 99—101; p. 106

(31) *Ibid.* p. 84

昭和40年11月30日受理